〔ま　と　め〕

① 基本的生活では、睡眠、身辺処理に要する時間が増加し逆に社会的生活は減少する。

② 更に余暇については、その内容は障害と共に質的に単純化する。

〔考　　察〕

筋ジストロフィーという進行性の障害が患者の日常生活にどのような影響を与えているのかを知ることは重要である。生活時間構造は、１人の人間の１日24時間の日常生活行動の分布を示すものであるが、これにより機能低下という障害が日常生活へ与える影響の一側面をとらえることが出来る。ＤＭＰ患者の生活時間構造は、機能低下が進むにつれて身辺処理やぼんやりなどの基本的生活時間が増加し、余暇などの社会的時間は量的に減少し、質的に単純化する傾向がみられ障害の進行に伴ない対人接触の減少も見られるようになり、特に stage 7 ～ 8 度の患者はほとんどをベット上で過ごしていることが解った。又今回は症例が少なく検討出来なかったがＤＭＰＤ型と比較した場合も時間量、内容共に差があるように思われた。

それだけに進行性という障害が患者の日常生活に与える影響は大きなものがあり、より豊かな生活を送らせる為にも、ＤＭＰ末期患者の療育指導というものが重要な意味を持つように思われ障害に応じた余暇活動の必要性を感じた。今後更に在宅患者の生活実態をも調査し障害が与える影響を具体的に検討して行きたいと思う。

10 筋ジス患者の年間行事による自己発現について

国立療養所兵庫中央病院
小　西　史　子　　荒　井　道　子
龍　見　代志美

筋ジス患者は、入院すると外部との接触が困難になり、通常の社会生活から隔離されるため、自己の殻の中に閉じこもりがちになる。従がって、院内および院外で患者が無理なく参加でき、長い病院生活に変化を与え、その中で自己発現できるところの各種行事を企画し、また参加させて、その効果と指導について考えてみた。

当院筋ジス病棟における年間行事は別表に示す通りである。外出する際は介助者を要するため父兄参加の行事が多いが、父兄も喜んで協力参加してくれている。患者達は昭和48年に自治会を

結成し、それ以来活動も活発になって来ており、行事の企画運営も自主的にやる面が増え、職員の仕事は側面的援助に変わりつつある。今まで消極的であった患者達が、少しずつ院外でも発表できるようになった。例えば、当院看護学院文化祭では、演芸部門で漫才、落語、寸劇などで参加し、台本や小道具の準備から全て積極的に自分達で用意して出演するようになった。また、絵が好きな者は、美術講座に参加し、その作品を市民文化祭に出品し、また展示会の見学にも出かける。さらに、県主催の「身体障害者社会学級生の集い」では、毎年「体験発表」の部で、自分の日常考えている意見を多数の聴衆の前で、明確に堂々と発表している。また余興の部でも、歌や漫才を多くの者が、明るく発表し得るようになった。

（別表）　　年　間　行　事　表

4 月	お花見会*
5 月	子供の日会，模擬店
6 月	スポーツ交流会*，将棋大会
7 月	七夕まつり，療育キャンプ（1泊）*
8 月	サマーキャンプ，ゲーム大会
9 月	お月見会，模擬店
10 月	旅行（1泊）*，模擬店
11 月	看護学院文化祭*，市民文化祭*
12 月	クリスマス会，模擬店
1 月	とんど焼，成人式，ゲーム大会
2 月	院内作品展，模擬店
3 月	ひなまつり，身障者社会学級生の集い*

他、年6回誕生会

（* 印は、父兄参加にて外出）

これらの行事に参加して来た結果、次のような点に変化がみられた。

1）行事参加を通して病棟外の社会生活に触れることにより、広い視野を持ち、病棟内生活にも自信と落ち着きがみられるようになった。

2）積極的に病棟外に出て経験を深めることを希望するようになった。

3）仲間意識に目ざめ、思いやりの心が持てるようになった。

これからの問題点としては、

1）症状の進行に伴なう肉体的制約の克服の仕方。

2）院外参加の際の親の負担が重いこと。

3）ボランティア、地域社会などとの積極的なとり組み方。

などがあげられる。これらを考え合わせながら、各行事参加を通して自己を表現する機会を多くし、持っている個性をできるだけ伸ばせるよう、援助していきたいと考えている。

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

筋ジス患者は、入院すると外部との接触が困難になり、通常の社会生活から隔離されるため、自己の殻の中に閉じこもりがちになる。従がって、院内および院外で患者が無理なく参加でき、長い病院生活に変化を与え、その中で自己発現できるところの各種行事を企画し、また参加させて、その効果と指導について考えてみた。